

## I-1 慢性期失語症者の日常生活

○立石 雅子<sup>1)</sup> 大貫 典子<sup>1)</sup> 千野 直一<sup>1)</sup> 鹿島 晴雄<sup>2)</sup>

失語症者のよりよい社会適応をめざすという観点から、良好な社会適応に関与している要因について検討してきた。今回、慢性期失語症者とその家族を対象に生活状況や意識に関する調査を実施した。その結果に基づき、慢性期失語症者の活動性、およびそれに関与する要因について検討した。活動とは「勢いある行動をする」とか、「活発に動く」という意味で用いられることばであり、本来、動きに重点が置かれた行為を表している。しかし本報告では活動性を、外出が可能かどうかというような行動面に限らず、人との交渉や趣味活動など主体的な行為を含めたものと解釈し、それらの行為をどの程度しているかという点で評価した。

【対象】 当言語室で訓練を行った慢性期失語症者71名とその家族を対象とした。男性54名、女性17名で、平均年齢は62歳、発症後平均経過月数は69.9カ月である。Raven色彩マトリシスの平均得点は28.5点であり、失語型の内訳は失名詞失語26名、Broca失語18名、Wernicke失語22名、伝導失語5名であった。失語症の重症度は軽度が29名で最も多く、次いで中等度23名、重度19名となっている(表1)。

【方法】 日常生活における行動の内容、頻度などに関する15項目、日頃感じている問題点などに関する13項目からなる日常生活に関する質問紙を作成した。失語症者に対しては対面でこの質問紙に対する回答を求めた。一方、家族については日常生活に関する質問紙、および患者の言語機能をどのように評価しているかについてCADL家族質問紙、社会経済的状況に関する質問の3種

を対面もしくは郵送により実施した。

先に述べたような活動性の定義に従い、日常生活における行動のうち「趣味活動」「友人とのつきあい」「種々の会合への参加」で作成した合成指標により活動性の高い群(高活動群)、活動性の低い群(低活動群)の2群に分類した。

【結果】 (1) 高活動群と低活動群の特性

高活動群は34名(男性27名、女性7名)で、一方、低活動群は37名(男性27名、女性10名)であった。両群の年齢構成については、高活動群は50歳代が11名、32%、次いで60歳代10名、29%となっており、49歳以下も7名、21%を占めた。低活動群は60歳代が13名、43%で最も多く、次いで70歳以上の12名、32%、50歳代の9名、24%と続き、49歳以下の若年者は皆無である。低活動群では60歳代以上の症例の比率が75%に達し、高活動群に比べ高年齢層の比率が高い(表2)。発症後経過月数については高活動群では発症後48カ月以内が56%、49カ月以上は44%、一方、低活動群では発症後48カ月以内が51%、49カ月以上は49%で、両群間で有意な差異を認めなかった。歩行は杖や装具使用を含め自立している症例が高活動群で94%、低活動群89%で、今回の対象は運動機能が総じて良好であると言える。就業している症例の比率は低活動群に比べ高活動群で有意に高い傾向を示した(表3)。

(2) 高活動群、低活動群における失語型および重症度

失語型の内訳をみると、高活動群では失名詞失語が全体の44%と最も多く、次いでBroca失語29%、伝導失語15%、Wernicke失語12%の順であり、一方、低活動群ではWernicke失語が

1) 慶應義塾大学リハビリテーション科

2) 慶應義塾大学精神神経科

表1 対象

症例数	71
性別	男性 54                      女性 17
年齢(歳)	62.0 (±12.7)
発症後経過月数	69.9 (±66.3)
RCPM	28.5 (±6.0)
失語型	失名詞失語                      26
	Broca失語                          18
	Wernicke失語                      22
	伝導失語                            5
重症度	軽度                                  29
	中等度                                23
	重度                                   19

表2 高活動群と低活動群の比較 (人)

	症例数	性別	年齢			
			～49歳	50歳代	60歳代	70歳～
高活動群	34	M27 F 7	7	11	10	6
低活動群	37	M27 F10	0	9	16	12

表3 高活動群と低活動群の比較 (人)

	発症後経過月数		歩行		職業
	～48カ月	49カ月～	独歩可	要介助	有職
高活動群	19	15	32	2	19
低活動群	19	18	33	4	9

表4 高活動群と低活動群の比較 (人)

	失語型			重症度			
	失名詞	Broca	Wernicke	伝導	軽度	中等度	重度
高活動群	15	10	4	5	19	10	5
低活動群	11	8	18	0	10	13	14

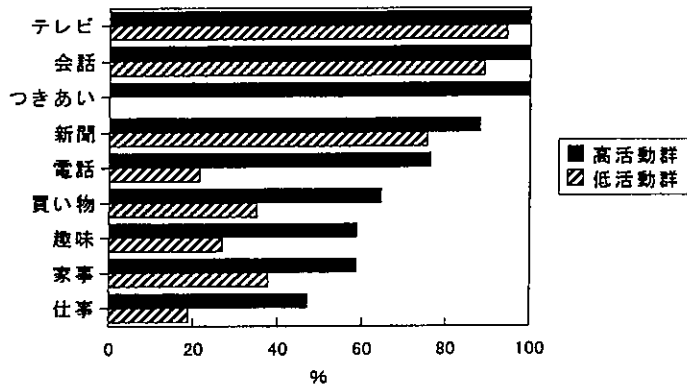


図1 高活動群と低活動群の日常生活の比較

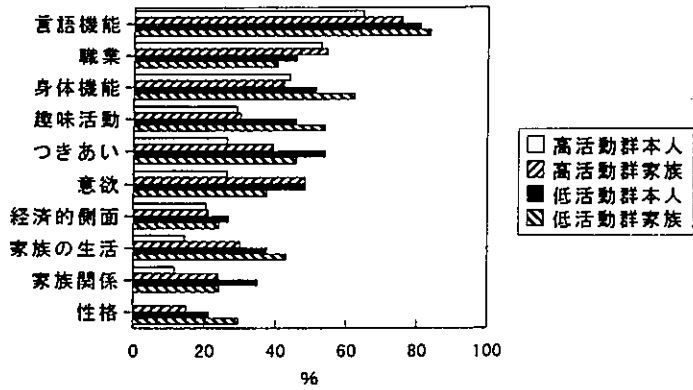


図2 高活動群と低活動群における「変化を感じる事柄」

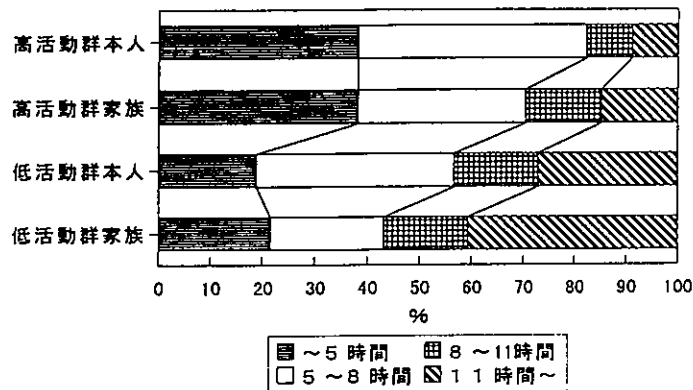


図3 一緒に過ごす時間 高活動群と低活動群との比較

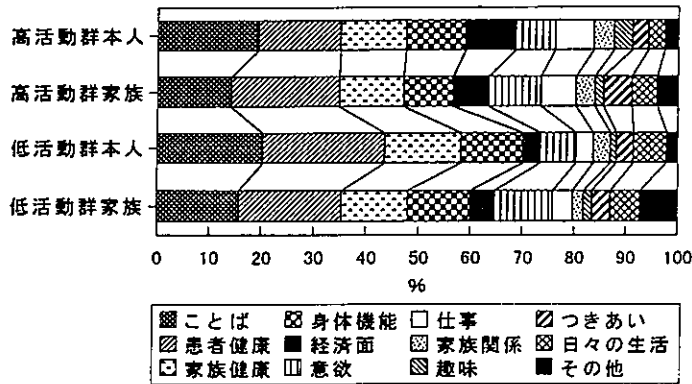


図4 不安に感じる事柄  
高活動群と低活動群との比較

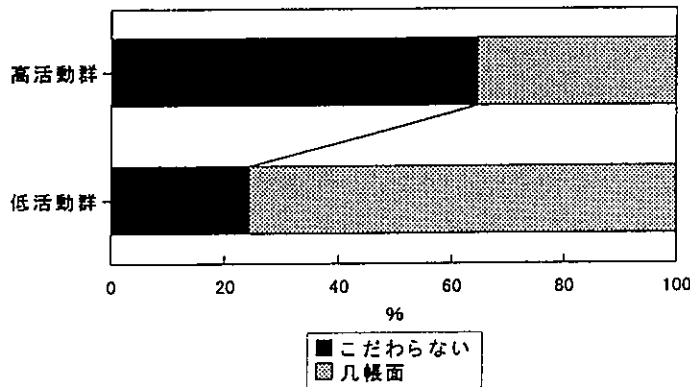


図5 高活動群と低活動群の性格傾向

49%と最も多く、次いで失名詞失語30%、Broca失語22%となっており、失語型の構成は両群で大きく異なった。言語障害の重症度については高活動群では軽度が56%、次いで中等度29%、重度15%の順となっている。低活動群の方は、重度が38%と最も多く、次いで中等度35%、軽度27%であり、低活動群では高活動群に比べ重度の症例が多い傾向を示した(表4)。

(3) 日常生活における行動の比較

日常生活の行動について月に1回以上行くと回答した比率を高活動群、低活動群別に示したものが図1のグラフである。「買い物」「仕事」などは別にしても、「テレビを見る」あるいは「家族との会話」など、きわめて日常的な家庭内の行動についても、よく行っているとの回答の頻度は低活

動群に比べ高活動群で高い。

(4) 発症前後で変化を感じる事柄

低活動群に分類された症例は、元来の性格として人とつきあうのは苦手、あるいは病前から特に趣味を持たなかった、という症例ではないか、すなわち、失語症の発症に拘わらず、症例がはじめてから持っていた傾向が示されただけではないかと考えることも可能である。そこで、種々の事柄について発症前と比較して変化したかどうかという問いに対する回答を検討した(図2)。グラフは「大きく変化した」との回答の比率を、高活動群の本人、家族、低活動群の本人、家族についてそれぞれ見たものである。「大きく変化した」との回答の比率はいずれの項目についても低活動群で高活動群に比べ高い傾向を示した。比率が最も高

いのは言語機能であり、次いでつきあい、身体機能、意欲、趣味活動の順である。低活動群の患者のみならず、家族も大きく変化した項目として言語機能、身体機能に次いで、趣味活動やつきあいを挙げている。したがって低活動群では、本人も家族も人との交渉や趣味活動などについて病前に比べ大きく変化したと捉えており、主体的な行為をほとんど行わないという現状は、症例が本来持っていた傾向とは考えにくいことが示された。

#### (5) 家族とともに過ごす時間

高活動群では家族とともに過ごす時間が5時間未満との回答が38%を占めるのに対し、低活動群では19%にとどまった。逆に11時間以上一緒に過ごすとの回答の比率は高活動群では9%、低活動群では27%であった。高活動群では就業している症例の比率が高く、そのような場合には本人と家族との生活の内容が異なることは考慮するとしても、高活動群は低活動群に比して家族とは別に行動する傾向を示している(図3)。

#### (6) 不安に感じる事柄

高活動群の症例が不安に感じる比率の高い事柄は、「ことば」「患者の健康」「家族の健康」「身体機能」、次いで「経済的な事柄」「意欲」「仕事」となっていた(図4)。一方、低活動群では、「患者の健康」が最も高比率で、23%を占めている。次いで「ことば」「家族の健康」「身体機能」、さらに「意欲」「日々の生活」の順であった。高活動群、低活動群ともに、ことば、身体機能などの機能面、また本人および家族の健康、さらに本人の意欲は共通して挙げている事柄であった。一方、高活動群では「経済的な事柄」や「仕事」を、低活動群では「日々の生活」を、それぞれ不安に感じる事柄として挙げているところが異なった。高活動群では種々の行動を行う上での不安を感じているのに対し、低活動群では高活動群に比べ「本人の健康」の比率が高いこととも合わせ、日々の生活をどのように過ごすか、あるいは健康や機能など自己自身に関心が向いていることが窺われた。低活動群の症例は現状を病前とは異なったものとして認識しているが、実際には活動範囲を拡

大できない、あるいは主体的な行為を行えないという状況に満足していないことが推察される。

#### (7) 性格傾向

「外向的で細かいことにはこだわらない」から「几帳面、完全主義」までの4段階評価により、自己の性格傾向を失語症者が評定した結果を示す(図5)。「外向的で細かいことにはこだわらない」は循環気質に、「几帳面、完全主義」は執着気質にそれぞれ対応する。高活動群では循環気質の比率が高く、低活動群では執着気質の比率が高い傾向を示した。このことから高活動群の生活状況や意識と循環気質が、低活動群の生活状況や意識と執着気質が、というように、活動性と性格傾向との間には関連があることが示唆された。

【まとめ】慢性期失語症者71名を対象として日常生活に関する調査を行った。その結果を活動性という観点から活動性の高い高活動群と活動性の低い低活動群の2群に分けて検討した。高活動群の年齢構成は低活動群のそれより若く、就業している比率が高い、失語症の重症度は軽度の比率が高いという特徴を示した。高活動群に比べ低活動群ではつきあいや趣味活動などについて、病前に比べ大きく変化したと感ずる比率が高いこと、家族と一緒に過ごす時間は低活動群でより長いこと、不安に感じる事柄は、両群で共通する健康や機能レベル以外に、高活動群では経済的な事柄、仕事、低活動群では日々の生活というように事柄が異なる、など群間で差異が認められた。また自己評価による性格傾向では高活動群で循環気質の比率が高く、低活動群で執着気質の比率が高いなど、活動性と性格傾向には関連のあることが窺われた。

活動性については年齢、言語障害の重症度、性格などの要因が関与していることが推測される。しかし、年齢は高くても活動性が高い症例、言語機能の障害の程度が軽度であっても活動性の低い症例など、ひとつの要因では説明がつかない例も多く認められる。今後は要因間の関係について検討を進める必要があると考えられた。